

地理学の諸相

田宮 兵衛

1. はじめに

地理という言葉にはじめて接するのは、おそらく小学校である。しかし、自分がどこにいるのかを認知するのはもっと早い。家の近所で遊ぶ時、直ちに家に戻れる範囲であるかどうかの意識はある。親の外出に同行する未就学児童でも、日常の行動範囲を超えたかどうかは容易に気づく。すなわち、空間における自分の位置の認知には本能的な部分がある。自らが直接認知できる範囲を超えて空間が広がっていることに気付いた結果、それを知ること何らかのメリットを見出せば外界への好奇心が生じたことになる。他方、親やそれに連なる社会は、こどもに外界のことを教えておけば何かと便利である。ということで、教育の社会化の結果は外界の認識に役立つ知識を、地理と称して学校で教えることになる。好奇心と学校で教わる地理的知識が一致した人はとりあえず幸福である。

地球という太陽系の第三惑星に発生した生物の進化の現在のところ先端にいる人間という生物の上で述べたような特性を、人類の知識体系中に組み込み、それを地理学と名付けるのであれば、地理学は存在する。世界観というのは、その知識体系の一つの表現である。あるいは、人間—環境関係という表現もできる。一旦成立してしまうと、如何なる学問でも関係者の共通認識に基づく何らかの約束事ができあがる。これが、規律さらには戒律というべき仰々しい単語にふさわしいレベルと

なるのは、学問を権威主義発露の場にしたい人物が学界で権力を握るという、人類の本質的欠陥が学問の世界にも繰り返し適用されてきた結果の積み重ねにすぎない。

自分の周りの空間を拡大していく原動力としての好奇心が強ければ、自ら未知の空間を克服し、既知の空間を拡大していくことになる。旅行家といわれる人はそういうことをする。地理学の教科書は、時として地理学史から始まる。そして、ギリシア時代にもローマ時代にもアラブのムスリム世界にも、旅行家がいて文字記録を残し、彼らは地理学者であるということが書いてある。それは教科書なので当然ではあるが、明らかな勇み足であり、本当はどのように位置付ければ良いであろうか。彼らがやっていたことは後に言う地理学であったかもしれないが、その当時はまだ地理学は無かった。彼らは何に貢献したのであろうか。

中世は終わる（その時までの空間的好奇心の充足は、変化がなかっただろうという推定に基づく飛躍である）。空間的には大航海時代という形で、精神的には自由を求めて、はじめは行き当たりばったりであったが、次第に系統的な調査が始まる。それまで大洋に阻まれていた空間的な好奇心は、船という道具で克服された。色々な人々が世界をめぐるたり一周したりした。彼らは色々なところで色々なことを発見する。彼らに共通するのは、知的好奇心を空間的に満たしたことである。遠くギリシア時代の旅行家と同じ事をしたの

である。今度は、その色々な人々を地理学者と呼んでもあまり無理な印象はなくなってくる。今、我々の空間的好奇心を絶対的に阻んでいるのは宇宙空間という真空である。その障碍を超える旅行家はあるであろうが、その人を地理学者と呼ぶようなことには決してなるまい。

空間的好奇心を求めて船に乗った人々が得たのは何であっただろうか。船は一人乗りの手漕ぎボートではなかったのも、個人的な知的好奇心以上の何事かがなければ、それなりの船で航海することは不可能であっただろう。それは、世界の果てに埋もれる金銀財宝であつたかもしれないし、自らの信じる神の教えを広めようという当事者にとっては高邁な思想だったかもしれない。いずれにせよその後、前者は植民地経営となり、後者はそれに道義的裏付けを提供することになる。

これとは別に、地理学者として空間的好奇心を満たした人もいたことを信じる。彼らが得たのは何であっただろうか。その地理学者が属していたグループの世界観がよって立っていた基盤を更新したことは確実である。それまで知らなかったことが知識体系の中に組み込まれれば、体系全体に変化が生じると考えるのは当然である。地理学がもたらした変化は、ルネッサンス以降、知識の分節化によって深化という進化に成功する西欧近代科学一般が目指した方向とは異なる。その分節的解釈結果も着々と世界観の更新をもたらしてきた。

地理的発見の時代には世界観の更新は発見しただけでできた。大発見が無くなることは、地理学の存在理由を弱める方向に作用する。1つの可能性は枝葉末節の発見も発見と言い張ることであるが、そんな事だけをしていたのでは、かつてのような輿論の支持は得られないだろう。

2. 寄生する地理学

なんだかんだ言っても学校で地理を教えることが確立している。地理的知識をパックにして教える地理教育の意義に関して、社会的に認識は共有された。それによって、生徒は自分が今どこにいるかを、地名・国名・経緯度などによって知ることができるようになる。さらに、自分の置かれている所の自然環境、社会的環境が如何なるかを知ることになる。それは、将来の国民の持つべき世界観の基盤に置かれる。そこで、地理教育を担当する地理教員が必要となる。

初等中等教育の地理教員は、学校の先生なので、まず師範学校で養成することになった。第二次世界大戦敗戦後、師範学校は学芸大学、後に教育大学になる。同時に、非教員養成系大学卒業者も教員免許を取得することになる。そのような教育を行う組織の名称は地理学科であることが多かった。しかし、地理教育と大学における地理学の関係は、少なくとも我国においては、屈折している。以下それについて詳述しよう。

地理教育において目的は時代によって変わり得るが、取扱う現象が自然環境・社会的環境をカバーするのであれば、その内容は常に多様である。したがって、地理教員養成のための師範学校・大学の教員がカバーすべき情報も多様である。すべてを1人で教えるのは困難であり、1人で教えなければならない必然性も無いので、知識の分節化によって進化した多様な discipline (専門分野=出自学科) の出身者によって地理教員養成の大学教員グループは構成された。彼らのレッテルとして地理学者は誤りではないが、当然のことながら地理学の discipline (戒律) はまだない。

彼らには、地理学の discipline (戒律) は不必要であり、それが無くても地理教員養成は成立した。そして個々の教員の行動原理は、それぞれが出自した discipline (専門分野)

それぞれの discipline（戒律）であり、彼らを統一する地理学の discipline（戒律）を確立することは容易なことではないし、実際にはできなかった。ところがいかに、地理教員養成目的の大学教員グループであっても再生産はできる。というより、彼らが初等中等教育地理教員の養成の他になし得たことは、その養成を行う自らの後継者の養成であった。その時引き継がれる discipline（戒律）は、引き継がれるべき discipline（戒律）が地理学には無かったので、それぞれの discipline（出自学科）の discipline（戒律）であった、あるいは引き継ぎなしである。

ところがさらに、出自分野はその分野の応用と考えている現場に、そのトップクラスを派遣することは少ない。また、寄り合い所帯では、出自分野に関しては日常的切磋琢磨の機会が少ないのも当然という現実があった。こうして、地理学としての discipline（戒律）なき教員の集合体には、集合体としての質の劣化が生じる。そしてこういう劣化は放置すれば二代目、三代目になるとますます進行する。

このような状況下で起こった劣化の一つが、地理教育と地理学の関係を見誤ったことである。初等中等教育地理教員を養成する大学教員が、後に地理教員となる学生より知識が多いこと、世故に長けていることをもって、初等中等教育と大学教育の本質的な差とみなしたことである。数学と数学教育にみられる差が地理の場合にも成立すると思い込んだことである。これらの問題点は、年齢の補正を忘れたという初歩的誤りを犯したというだけではない。「地理教育は地理学の応用」というようなことを言い始めるようになる。教育地理があるから地理学が存在し、地理教員がいるから地理学者という存在があり得る現実を考えると、傲岸不遜というべきであろう。

これを指して筆者は、「地理学が地理教育に寄生している」と表現する。寄生は、たと

えば財政的構造は同人雑誌と同じである学会誌において、大学教員を対象とした学会運営の経費の大部分を初等中等教育地理教員が納入する会費を搾取することによって得てきたというような道義的退廃の形であられる。

寄生虫は宿主を殺しはしない。地理学も地理教育を無くそうとはしなかったかであろうが、寄生一宿主関係以外の要因で宿主が滅びることはいくらでもある。地理教育がなくなったときそれに寄生する地理学はどうなるのか、という問題は、初等中等教育における地理教員に対する需要が無くなった時点で、全国規模で実現した。その後まだ大学にはある程度、地理学科の組織は存続しているが、それは慣性なのであろう。

3. 迷走する地理学

我が国において地理学は、前節で述べたような道義的退廃に陥っていたのであるから、決してまともではありえない。地理教育を行う教員を養成する仕組みとしての大学の地理教育の知的限界が示される。

たとえば、筆者は、地理学科に入学後しばらくして「地域とは地域性を同じくする所である。」という趣旨の同語反復の説明を大先生から受けてたまげた記憶がある。また、昔の就職運動の際「地理学とは何をやっているのか」と問われて答えに詰まるという話は、言葉こそ就職活動に変わった最近でも、いっこうに解消されていない。必ずしも就活学生ではないシチュエーションでは、「地理学やっているならば、世界中の国の名前は言えるでしょう」とか言われて笑ってごまかした体験、あるいは、憤然と「地理学はそんなモンじゃない。」と言ってみたりもできる。もし、「それなら、どんなもんじゃい？」と問われたら、答えに窮することであろう。

以下は、似たようなシチュエーションでの筆者の体験である。前世紀後半も半ばを過

ぎたところであるが、「気候学は気象学の応用」という既成概念に縛られていたある気象業界人が、地理業界の気候学者に「気候学ってなんですか？気象統計のことですか？」という質問を行ったところ、その気候学者は「気候学はそんなモンじゃない。」と答えるが、それ以上の説明はなかったそうである。この話の深刻さは、世界の気象業界が看板のタイトルを「気候」に切り替えつつある時点に、上記の質問をした気象業界人とそれに答えられなかった地理業界の気候学者の存在である。

次に述べるのは、地理学における迷走の典型と筆者が考える問題である。それは、自然環境決定論 vs. 可能論という極めて馬鹿げた議論であった。なぜ馬鹿げていたかという理由が以下の説明である。

「自然環境決定論」という考え方の意図する所は、人間－環境関係の大局的把握である。ここで、人間－環境関係を担当すべき地理学が犯した過ちは、「自然環境決定論」のヴァリエーションに過ぎない「可能論」を「自然環境決定論」と対置させたことである。たしかに、「自然環境決定論」を現実の局所的問題へ性急に適用した結果からは現象の表層的な解釈、さらには硬直化した社会の解釈しか得られない。さらに悪いことには、その解釈で思考停止を起こす。これには多くの前例がある。したがって、「自然環境決定論」を否定することは容易にできる。否定の根拠に同じ「自然環境決定論」を持ってきて、御丁寧にもそこで思考停止したことが、地理学が迷走していることの証拠であろう。

「自然環境決定論」における人間－環境関係の大局的把握とは、事実認識ではなく見方すなわち、世界ないしは歴史を認識するに際しての立場の問題であり、「人間が本質的に自由と考えるか否か」という問に対する立場の選択である。あるいは、人間－環境関係を論ずるに当たり、如何なる足場の上にそれを構築するかという問題である。

「自然環境決定論」を、精神活動を含む人間の活動が、外部要因により決定され、決定内容を事前に認識できるという物理的決定論のアナロジーとすれば、誤っていることは明らかである。だからといって、太陽系の第三惑星である地球に生物が発生したことの結果としての人類の歴史が、自然環境から全く自由に人間の意志だけで定まるはずはないので、「自然環境決定論」の完全否定も誤りである。また、人類は、自然条件への対応を多様な可能性から選択できるとする『可能論』は、「人間が本質的に自由と言えるか否か」という選択において、自由を否定しており『自然環境決定論』のヴァリエーションに過ぎない。

「自然環境決定論」が持つ魅力は、「個々の人間、個々の人間集団に能力差があるのか？無いとすれば現在の差の原因は環境。」という個人の尊厳を尊重する点にある。これが、モンテスキュー(1989)の「法の精神」、テーヌ(1939)「英国文学史の序論『文化史の諸原動力と風土』」、あるいはハンチントン(1938)の「気候と文明」、日本では和辻(1979)の「風土」、梅棹(1967)の「文明の生態史観」という形で、常に繰り返されている理由であろう。最近の例には、ダイヤモンド(2000)の「銃・病原菌・鉄」がある。

他方、世間一般には「決定論」に対する拒否反応もあり、「自然環境決定論」の他、マルクス主義、また遺伝子決定論がその対象である。これは、「決定論」一般が人間の自由を否定するという理由で忌避されていることを意味する。

そうはいつても、「自然環境決定論」が論理的・科学的に誤っていたのではこの話は成立しないので、念のため以下を述べる。「自然環境決定論」の科学的解釈であり、同時に決定論の限界についての説明でもある。

まず、「環境決定論」が紛糾するのは、決定の過程が複雑なことがある。複雑さは、力

オス論で説明する部分と、エピジェネティックス (epigenetics) が関わる議論からなり、それぞれが複雑さを演出している。

第一に「カオス」(グリック 1991, 戸田 1991 等) であるが、これは、因果関係に非線形過程が含まれる現象については、人間が認識できないほど僅かな初期条件の差が、まったく異なる経過・結果をもたらす場合があるということである。すなわち、人間にとっては「同じ条件」から、いくらでも異なる結果が生じるように見えるが、実は「同じ条件」と思っていたことが誤りで、違いを識別できなかったに過ぎない。それを人間の自由と思うとすれば、その言葉づかいは、重力場の中を落下することを自由落下というのと同じである。

エピジェネティックス (佐々木 2005; Qiu 2006 等) とは、人間という生物の問題なので地球型生物の根本にある遺伝子とその機能を発現するかどうかについての議論である。人ゲノムの解読はなされたが、解明は進んでいない。しかし、一般には、解読ですべてがわかったかのような誤解がある。その究極の誤解が「遺伝子決定論」であり、「自然環境決定論」と似たような問題がある。

しかし、状況により機能する遺伝子が異なり、発現する形質が決まる。すなわち、遺伝子があることとそれが発現し機能するかどうかは別の問題という考え方が現在のエピジェネティックスである。「獲得形質は遺伝する」と 19 世紀に説いたラマルクの用不用説のゲノム的解釈とも考えられる。DNA 上にある遺伝情報は、メチル化されること、またはヒストンに巻き取られることによって、直ちに活性化できる状態ではなくなる。全く同じゲノムの持ち主(一卵性双生児がこれに該当する)が、同一の環境条件下で異なる状態を示すのは、メチル化・ヒストンがかかわっている。メチル化およびヒストンが遺伝子の機能を不活性化するのも、それが解消されるのも遺伝

子を取りまく環境条件しだいである。そして環境条件には選択の余地がある。しかし、遺伝子情報にない形質は決して発現しない。

したがって、人間は遺伝子決定論と自然環境決定論の中での自由を謳歌していることになり、その自由を行使しなければ、何事も始まらない存在である。これについては、田中 (2007) が電卓である種の計算をやると Lot の違いで結果が違ってくる事実を利用して決定論の中での自由の大事さを述べている。この議論で大事なことは、自然環境決定論の場合、人類が発生して来た過程における自然環境を逸脱しては生きてはいけませんが環境を変えることはできる、遺伝子決定論の場合、ゲノムにない情報は決して発現することはないが、ゲノムにある情報はコントロールできるということである。

本節では、地理学が如何に迷走しているかを、示すために地理学における「自然環境決定論」をめぐる議論について述べた。念のため繰り返すと、「自然環境決定論」の肯定、否定は、世界ないしは歴史を認識するに際しての立場、すなわち事実認識ではなく見方の問題、「人間が本質的に自由と考えるか否か」の立場の選択である。現実には「自然環境決定論」の肯定と否定の中間にある。

4. 恫喝する地理学

本節の題は「ダミ声で威す地理学」でもよかったのであるが、他節題と平仄を合わせた結果こうなった。印象としてはヤクザに脅かされる感じである。といっても、筆者にはヤクザに直接脅かされた経験はない。数年前 TV で流された光景に、国会で野党議員が議事妨害のため院内で座り込みをしている場面に、与党議員が出てきて何か話し始めたかと思うと、突然声音を変え、ダミ声で威嚇し始めた姿があった。政権党の国会議員は土建屋で、土建屋はヤクザという思い込みがあるの

で、その時の記憶が前記印象の根拠となっている。ただし、「ヤクザ→土建屋→自民党の国会議員」の部分は実証されたことでも証明されたことでも全くない。

ここで、実証されていることは、ダミ声で威すという技法が、議論を有利に展開させる目的で使えると信じる人物が地理業界に存在したことである。議論が地理業界内部で閉じていればまだしも、他分野との交渉においてもダミ声で威すという技法を用いていたとすると、地理学の命脈はすでに尽きたといつてよかろう。このような世界観の持ち主である筆者は、他の学問分野ではこういうことがないことを信じている。

暴力が支配する世界でダミ声による恫喝が有効であることは、想像に難くない。しかし、地理学とはいえ学問の世界でこの技法が使用され、したがって有効であったのであろうことはしばらく理解できなかった。後日、次の事実を知って納得できた。すなわち、視力が常人より低いある人物が、完全に視力が無い人々をも収容している施設に入れられた。その人は視力差を利用して、その施設の人々を支配する技術を入手する。そして、他人を支配するという技術は平常人相手にも活用できた。ある新興宗教のもたらした厄災の基本はそこにあった。大学という学問の世界では、恫喝は普通おこなわれない。そこで恫喝によって他人を支配する技術を身につければ、上の例と同じように他人を支配することができるようになるという解釈である。

このところ、幸いなことに学内の交渉はもちろん、学科内交渉でも地理学の教員による恫喝の話は聞かない。しかし、学生相手には恫喝または大声で威嚇するという話はまだ聞く。

5. 滅亡する・崩壊する・瓦解する地理学

まあ、こんなことをやっているのは、学問としての地理学は、発展することはおろか維持すらおぼつかない。滅亡するか、崩壊するか、瓦解するかいずれかわからないけれど地理学の将来は決して明るくはない。それでも、45年前も同じ感じを受けていたので、もしかしたら、常にそういう状態にあるのが地理学なのだろうか。

いろいろな地理学があった。古くはマルクス主義地理学、計量地理学、人文主義地理学、フェミニスト地理学、時間地理学等々名前を挙げるのも大変である。それらは、地理学の discipline (戒律) に何事かを書き加えたであろうか。そうなる前に、それぞれの持つ欠陥が指摘されると弊履のごとく捨て去られる。捨て去るときは、ロシアの古いことわざのごとく「産湯と一緒に赤子をも流してしまう」ので、それらが地理学の discipline (戒律) に何事か寄与する点があったとしても、残されていない。

地理学科で優秀とされた学生は『山のあなた』主義者であることが多かった。これはトランス・モンタニズム (Trans-montanismus) の訳であるが、それぞれの分野の宗主国への憧憬に生きる姿である。

地理学が寄生してきた地理教員の養成が必要ではなくなったとき、地理学は何をしたか。物理学の応用である自然地理学、時に応じて宗主国を変える人文地理学、いずれも地理学の discipline (戒律) はないけれども、何か他と違っていることを示そうとする。昔は、「地図を使う」ということであった。この頃は、「フィールドワークを重視する」というようなことをいう。現在からしばらくは、まだ「人間－自然環境関係」が使えるようで、本文もそうしている。しかし、これらのキーワードは地球上の事物・現象が理解できたとすれば、人文科学・社会科学・自然科学を問

わず、どの学問からのアプローチであってもクリアされているはずである。すなわち、「事物・現象の空間構造」、それが生起している「現場の状況」、「自然環境の中の人間」という現象は、本質に関するものである。

数は減ったとはいえ、地理教員養成はまだ社会的に要請されている。その分地理学は“established”な存在なのかもしれない。他分野が口にしない場所、場所性のような言葉を使って独自性を主張しようという姿勢は、研究の中味ではなく外貌で勝負することになり守りの姿勢ではないかと思うが、本文で書いてきた現状で守りの姿勢をとれるというのも評価に値することである。筆者も学位論文の評価に際しては、この姿勢をとらざるを得ない。

引用文献

- 梅棹忠夫 1967. 『文明の生態史観』中央公論社. 258p.
- グリック, J., 大貫昌子訳 1991. 『カオスー新しい科学をつくる』新潮社. 536p., Gleick, James 1987. *CHAOS - Making a New Science*.
- 佐々木裕之 2005. 『エピジェネティクス入門』岩波書店. 112p.
- ダイヤモンド, J. 著, 倉骨 彰訳 2000. 『銃・病原菌・鉄 (上・下)』草思社, 317+332+XVIIp., Diamond, J. 1997. *GUNS, GERMS, AND STEEL The Fates of Human Societies*.
- 田中 博 2007. 『偏西風の気象学』成山堂書店, 196p.
- テーヌ, H. 著, 丸山誠次訳 1939. 『文化と風土』改造社 304p., Taine, Hippolyte Adolphe 1864. *Histoire de la Literature anglaise*.
- 戸田盛和 1991. 『カオスー混沌のなかの法則』岩波書店 (NEW SCIENCE AGE-46), 140p.
- ハンチントン, E. 著, 間崎万里訳 1938. 『気候と文明』岩波書店, 400+22p., Huntington, Ellsworth 1924. *Civilization and Climate*. 3rd ed., Yale Univ. Press, 453p. (Reprinted by Shoe String Press as an ARCHON BOOKS in 1971).
- モンテスキュー著, 野田良之他訳 1989. 『法の精神 (中)』岩波書店, 433+3p., Montesquieu, Charles-Louis de secondat, Baron de, 1748. *De l'esprit des lois*.
- 和辻哲郎 1979. 『風土ー人間学的考察』岩波書店, 298p.
- Qiu, Jane 2006. Unfinished Symphony. *Nature*, 441:143-145., エピジェネティック・コード. *Nature DIGEST*, 3-7: 12-15.

たみや・ひょうえ
お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科研究院人間科学系

Some Aspects of Geography

TAMIYA Hyoe (Graduate School of Humanities and Sciences, Ochanomizu University)